

30周年記念号発刊によせて

島根大学農学部研究報告第13号をお手元へお届けすることになりました。本年は島根大学が創設されて、30周年ということで、本号を30周年記念号と銘うって、33題の論文を登載いたしております。

ご承知のとおり、島根大学農学部報告としては、国立移管完了直前の昭和42年12月に創刊号が発刊されました。しかし、これは勿論、島根農科大学研究報告を継承されたもので、通巻いたしますと、今回の研究報告は第28号ということになります。ここまで研究報告が成長いたしましたのは、教官各位のたゆまないご研鑽と、編集に携さわられた方々のご尽力のたまものと、厚くお礼申しあげます。

新制大学が発足して30年、これまで旧制大学へ右へ並えすることに多くのエネルギーが消費されてきたように見うけられます。しかし、^{よわい}齢30をむかえ、地域に根をおろした地方大学の姿作りに、いっそうの努力がはられねばならないと考えております。大学の研究報告においても然りで、いちだんと質の拡充時代に入ってきたかと思われま。

どこの大学学部でも、なんらかの形で、研究報告に類するものを刊行しております。しかし、その客観的評価については、種々の論議がなされていることは否めない事実のようです。現在、実現化の道をたどっております農水産系連合大学院の関係委員会でも、教官の業績判定について話題の対象になっておりますのが、この大学の研究報告です。曰く「編集権にかかわるレフェリーの存否」、曰く「頒布範囲の制約にとまなう活用度の問題」等々。

たしかに、身近な報文掲載の場としての研究報告の価値の大きさを否定する方はないと思います。しかし、研究報告を安易にこのような位置づけにとどめ、投稿、編集を重ねてゆくならば、その行きつくところは自ら明らかだと思われま。しかしながら、その大学学部になつた研究報告のあり方を明確にし、それにみあった内容豊かな研究を投稿、さらに、編集者がそれに磨きをかけ、密度高い論文集を作りあげる努力を怠らないかぎり、その存在価値はますます高まるものと思われま。たしかに、私どもの周辺には、近年とみに、報文掲載の場が拡大してきております。各種学会誌、同支部会誌、さらに、各種研究会報などひしめいております。

その意味からも、大学の研究報告の性格づけを鮮明にする必要があるように思われます。これらの中で、学会誌は最も権威あるものとされております。しかし、一論文の頁数の制限、あるいは、登載論文数の制約にともなう待時間の問題、さらに、審査、その他、手続きに時間のかかることから、投稿から発表までに長時間を要するなどの難点をかかえております。公表のオリジナリティーを生命といたします研究論文では、速報性というのは重要な要素となっております。その点では、明らかに大学の研究報告が優位にあるといえそうです。

30周年記念号が発刊されますことを皆様とご一緒にお慶びいたしますとともに、島根大学農学部研究報告をいっそう自分らのものとして、はぐくみ育て、オーソライズすることに努めようではありませんか。

昭和 54 年 12 月

農 学 部 長 山 田 一 郎